熊本県小学校教育研究会国語部会

令和５年度　研究テーマ

未来を拓く言葉の力を培う国語科学習の創造

～学びを自覚し，共に更新し続ける子供の育成～

研究部長　中里　宏

１　これからの社会に求められる力

今日の子供たちが成人して社会で活躍する頃には，Society5.0 時代が到来し，社会の在り方そのものが現在とは「非連続」と言えるほど劇的に変わるとされている。生産年齢人口の減少やグローバル化の進展，技術革新等により，社会構造や雇用環境は大きく変化し，子供たちが就くことになる職業の在り方についても様変わりすることが予想されるからである。

このような時代にあって学校教育には，一人一人の子供が自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，「持続可能な社会の創り手」となることができるよう，その資質・能力を育成することが求められている。

この資質・能力について考えてみたい。中央教育審議会（以下中教審）は，平成２８年答申において，次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力として，「文章の意味を正確に理解する読解力」，「教科固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力」，「対話や協働を通じて知識やアイディアを共有し新しい解や納得解を生み出す力」などを挙げている。また，『「令和の日本型教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（令和３年答申）』の中では，従来の日本型教育では「『自ら課題を見つけ，それを解決する力』を育成するため，他者と協働し，自ら考え抜く学びが十分になされていないのではないかという指摘もある」としており，今後，授業を通して児童が自らの思いや考えを深めることがさらに重要になる。

以上のことを踏まえ，国語科においても，子供の実態に寄り添い，きめ細かく指導・支援することはもちろんのこと，子供自身が学習の状況を把握し，主体的に学習を調整していく機会や，他者と協働して学び合う場を一層充実させていくことを通して，予測困難な時代を生き抜くために必要な「未来を拓く言葉の力」を子供に培っていくことが重要となる。その鍵となるのが，「言葉による見方・考え方」を働かせることである。

２　求められる国語科の力

国語科における，教科固有の見方・考え方とは，「言葉による見方・考え方」である。この教科固有の見方・考え方を働かせることが，教科の本質に迫る学びを生み出す。学習指導要領では，「言葉による見方・考え方」を働かせるとは，「児童が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めること」と示されている。

「言葉による見方・考え方」を働かせるためには，まずは「言葉に着目して，自分なりの考えをもつこと」が必要である。その上で，考えたことを問い直す学びを行うことで，自らの「言葉への自覚を高める」ことができる。このような学びを生み出すことを目指し，子供自身が学びを自覚する授業

を積み重ねることが重要である。これは，国語科の改訂の趣旨及び要点の中の『学習過程の明確化，「考えの形成」の重視』にもつながる。

また，「言葉による見方・考え方」はその子の既有知識・生活経験に大きく左右される。同じ言葉でも，どのように捉えるか，どう使うかについては，納得解はあっても絶対解はないことの方が多い。その納得解は，他者との交流によって広がり，深まっていく。そのような対話を通して，「言葉による見方・考え方」を働かせながら自らを更新していく学びが求められている。

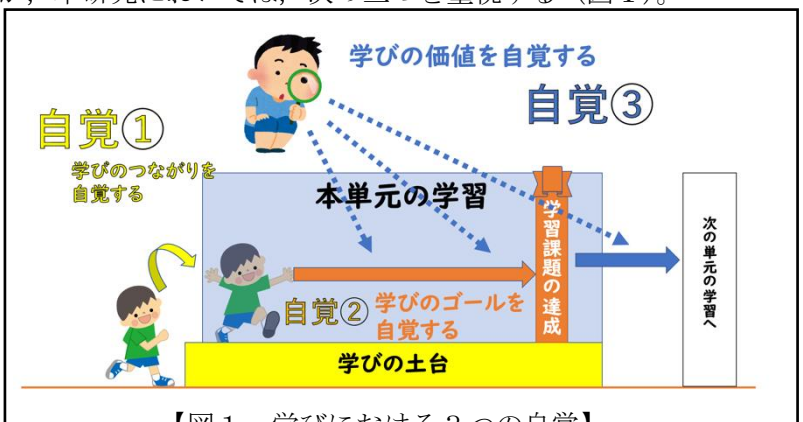
今後目指すのは，子供が『学びを自覚し，共に更新し続ける』授業である。このような授業を通して，小学校段階における国語科の学びを着実に蓄積し，他教科，日常生活，将来に波及するような汎用性のある資質・能力を育成していく。さらに，その力を活用し，予測困難な未来を仲間と共に切り拓いていきたいと自ら思えるような子供を育てたい。

3　研究の実際

（1）『学びを自覚し，共に更新し続ける』授業とは

学びの自覚には様々な捉え方があるが，本研究においては，次の三つを重視する（図１）。

一つ目は，「学びのつながりを自覚する」ことである。子供たちが，これまでの学習と単元の学習がどのようにつながっているか自覚し，単元の学習に向けて準備ができるように，学びの土台をつくる場を設定する。



【図１　学びにおける３つの自覚】

二つ目は「学びのゴールを自覚する」ことである。『学習課題』という学習のゴールを含めた大きな枠組を設定することで，子供は見通しをもって学習に取り組むことができる。

三つ目は，「学びの価値を自覚する」ことである。学びを振り返る視点を，学習内容だけでなく学び方へと広げる。そうすることで，子供たちは学びを立ち止まって振り返り，学んだことを整理したり，これからの学びの方向を修正したりすることができる。このような学びを通して，子供は自らの学びを自覚し，調整しながら学習へと取り組むことができる。

また，そのような学びの自覚には，対話が欠かせない。一人一人が考えを表出し，それを比較して共通点や相違点を見つけたり，主張を述べる際，根拠だけでなく，生活体験や経験などの理由づけを行いながら，対話の中で納得解を導き出したりしていくことで，子供は関わり合いの中で仲間と共に自らを更新していく。

以上のように，『学びを自覚し，共に更新する』ことを大切にしながら取り組むことで，子供は学び方を調整したり，見方・考え方を再構築したりしながら，自らを更新し続ける。このような授業を通して「未来を拓く言葉の力」を培っていくのである。

（2）視点について

『学びを自覚し，共に更新し続ける子供』を育む授業を展開していくために，以下に示す二つの視点を大切にした授業づくりを行う。

【視点１：学びを自覚するための手立て】

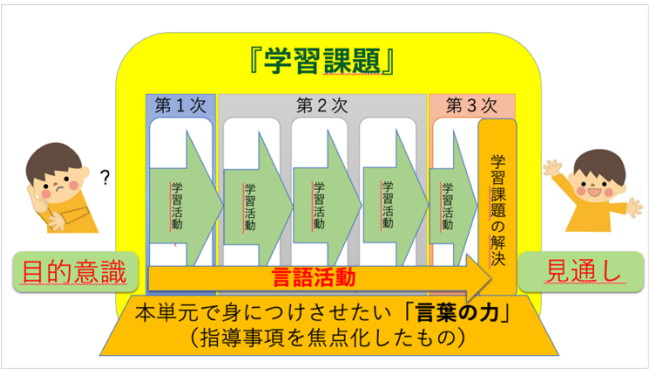
子供たちが自らの学びを自覚するために，三つの手立てを行う。学びの土台づくりでは，既習事項の確認や調べ学習などを行うことで，単元の学習内容へ向かう準備を整え，どの子も学習に取り組めるようにする。学びの指針となる『学習課題』は，子供にとって学習を見通すだけでなく，学びの価値を確認できるよりどころとなる。立ち止まって振り返る場は，学んだことを価値づける場である。このような学びを通して，子供が自らの学びを自覚し，調整しながら学習へと取り組めるようにしていく。

① 学びの土台づくり

子供たちの既有知識や生活経験には，大きな違いがある。これまでは，学校生活の中で，仲間と相互に補完していた部分が多かった。しかし，社会情勢の変化や子供たちの多様化によって，文化や言語活動など，学びの前提となる知識や経験が乏しく，単元の導入からつまずいてしまう子供もいる。そこで，第一次において学びの土台づくりを行う。関連する絵本の読み聞かせや体験活動，既習事項の掘り起こしなど，子供が学びに向かうことのできる土台をつくることで，どの子も学びのつながりを自覚でき，本単元の学習に取り組むことができる。

② 学びの指針となる『学習課題』

『学習課題』を設定する際，「指導事項」と「言語活動」の二つの視点を大切にし，子供の問いから学びをつくっていく。そうすることで，子供にとって，「この言語活動を達成するために，こんなこと（指導事項）を大切にしていく。」という自然な学びの流れができる。これは，教師の側から考えると「この力（指導事項）をつけるために，この言語活動に取り組ませる。」というめざす学習の流れでもある。



【図２　学習課題の設定】

その際，指導事項の焦点化も重要となる。せっかく言語活動で学習意欲が高まったとしても，単元の指導事項に適したものでなければ学びに齟齬が生じる。そのため，教師が本単元（教材）における指導事項を焦点化した「言葉の力」をしっかりと捉え，『学習課題』を設定する必要がある。

このような学びの指針となる『学習課題』を設定し，これまでの学びとのつながりや，これからの学びの価値を単元の導入段階で自覚できるようにすることで，子供たち一人一人が，自らの考えを大切にしながら，見通しをもって学ぶことができるようにする（図２）。

③ 立ち止まって振り返る場の設定

子供が自らの学びの価値を自覚するためには，学びを内省することが大切である。一時間や一単元の学習を通して，「何を学んだのか。自分の学び方（学びのプロセス）はどうだったのか。それは今後の学習にどのように生かされるのか。」等，自らを振り返る場を設定する。さらに，子供が書いた振り返りについて，教師がコメントを記入したり，授業で取り上げたりして丁寧に価値づけする。そうすることで，子供たちは自らの学びの価値を自覚し，学んだことを整理したり，学びの方向を修正したりする。

また，振り返りを子供同士で共有することも重要である。授業の導入や終末において，振り返りを共有する場面を設定することによって，本時の価値や学習内容を，他者の振り返りから学ぶことができる。振り返りの共有を積み重ねることで，子供は他者の振り返りを通して自らの学び見つめ直し，調整していく。

振り返りをきっかけに，子供が立ち止まり，自らの考えを見つめ直す。このような学びを通して，振り返りの価値を一層高めていく。

＜視点１における手立て＞
〇学びの土台づくり　〇学びの指針となる学習課題の設定　〇立ち止まって振り返る場の設定

【視点２：共に更新するための工夫】

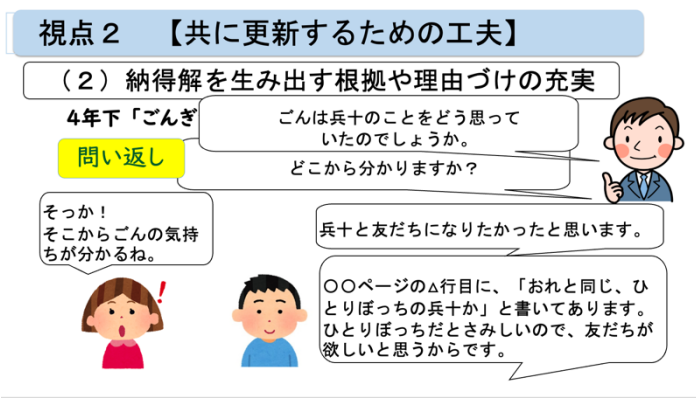
国語科において，「共に更新する」とは，他者と協働的に学ぶことである。自らの考えを表出し，比較・検討する場を設定することで，子供たちはお互いの考えの共通点や相違点に気づく。さらにその根拠や理由を述べ合いながら納得解を模索する中で，それぞれの「言葉による見方・考え方」が働き，考えが再構築され，更新されていく。

① 考えを表出し，比較する場

考えの比較・検討のためには，子供たちの考えの共通点や相違点が一目でわかるようなようにする手立てが必要である。言葉で伝える際はキーワードにしたり，シンキングツールやイラスト，色，動作化などを用いたりして思考を可視化する。そうすることで，子供たちは自らの考えを形にするために個々の「言葉による見方・考え方」を働かせる。また，どう違うのかだけでなく，なぜそれを選んだのか，それは何を根拠にしているのか検討し合う場を設定することができる。

② 納得解を生み出す根拠や理由づけの充実

他者との対話を通して納得解を生み出すために重要になるのが，自らの意見を支える根拠と，集団を納得解へと導く理由づけである。子供の意見が想像や思いだけに偏るときには，教師が積極的に関わり，問い返しながら根拠を明確にする必要がある（図３）。そこから，子供の既有知識や生活経験を引き出して理由づけを行いながら，納得解を生み出していけるようにする。



【図３　根拠を明確にする問い返し】

さらに，そのやりとりを「根拠」や「理由づけ」が明確になるように，構造的に板書で整理することも大切にしたい。中・高学年では，意見を支える根拠や理由づけが適当か検討し，さらに深く考える場を設ける。このような学びを通して納得解を模索する中で，子供たちは個々の「言葉による見方・考え方」を働かせ，自らを更新していく。

＜視点２における工夫＞
〇全員が考えを表出し，比較する場　〇納得解を生み出す根拠や理由づけの充実